

見性院住職からの一言 その十九（あらためて「出家」とは何か）

出家とは本来、世間に背を向けて生死を生きることです。途中出家とは本来のあるべきすがた、かたちとは言えません。人生後半で僧侶になることは。その目的は懺悔と恩返しの修行生活を送ることを意味します。少なくとも指導的立場になれるはずなどなく末席を汚すことのないように細心の注意を払うことが必須です。不埒な動機での出家だったのか純粋な仏道修行のための出家であったのか。出家後10年で本性が如実に表われます。途中出家で優秀な人はなかなかいません。老後の小遣い稼ぎのための出家では困ります。自惚れで僧侶になるため人の話は聞かない傾向にあります。（師弟関係は絶対的服従）実社会でドロップアウトしたことは棚上げにしています。周囲も甘やかすことなく常に厳しい視線で監視をしながら見守ることが肝要です。

宗門には「デモシカソウリョ」ということばがあるそうです。「僧侶にでもなるか」「僧侶にしかねない」おおむねはこんな人ばかりなのですが。浄土宗のご住職からの一言『一人前の僧侶になるには最低でも10年から20年はかかる。定年（老後）出家の僧侶が寺男以上になるには並み並みならぬ努力、研鑽は当然必要で、それでも僧侶としての品格を備えられる人などほとんどいません』とのこと。

私もかの住職の意見には同感します。今、世の中は「お寺離れ」「宗教離れ」「僧侶離れ」「葬儀離れ」が叫ばれています。僧侶の墮落と質の低下が問題視されています。格調のある法話や音吐朗々（おんとうろうろう）たる心が洗われるような読経など滅多に聞けません。そこにあるものは自惚れだけで生きている僧侶の声と姿だけです。俗世を離れた仏法の深奥幽玄（しんおううゆうげん）さなどかけらもありません。本来、僧侶とはそこにいてただお香が漂うような清涼感、滲み出るような雰囲気を出す存在です。私はかつて最乗寺に修行中、余語翠巖という師家の薫陶を受けました。余語老師が法堂（本堂）に入堂するや堂内は凜として独特の緊張感と荘厳さに包み込まれました。また老師が書院での茶話会に出席されて床の間を背に臨席されていた時はいつもその場が浄道場化されているのを若輩ながら感じたものです。まさに鎮座ということばに相応しい師家の凄みやありがたみというものを教えていただきました。今の時代はこんな老師は存在していないので私たちは誰から学べばよいのか路頭に迷うばかりです。少なくとも世の中に必要とされる存在になること。人一倍利他のこころをもって、菩薩行に励むことしかありません。そのための修行を怠りなく日々是好日（にちにちこれこれこうにち）の中でやっていきたいものです。

私は最近では中高年出家にも寺族出家にもあまり興味がなくなりました。期待をもてそんな人は少なすぎます。今は聡明で純粋、柔軟で素直、将来性のある在家の若い人を採用・育成していきたいと思えます。結局は優秀で出来ればエリート僧侶でないと使い物にはなりません。粗製乱造は罪悪であったと恥ずかしながら今ようやく気付きました。これからの時代のキーワードは「少数精鋭」のように思えます。いらぬ僧侶は還俗・廃業をさせていくべきです。「寺院消滅」時代ですから尚更です。弟子も信徒もふるいにかけないといけないと思えます。幸い引く手あまたなので何も心配をしていることはありません。

寺院消滅時代の究極的救済措置の施策は。私は寺院の構造改革、制度改革にあると思えます（お寺の民営化）。最も重要なことは意識改革であることは言うを待ちません。これからの次世代を担う住職、副住職の方に申し上げたいことは、あなたは職業としての僧侶を選んだのですか、生き方としての僧侶を選んだのですかと聞きたい。生き方としての僧侶を選んだ人は仏飯を食（は）むことに誇りを持ち、坐禅をすることを何よりも楽しめる。そんな人を世間が放っておくことはありません。「法輪転ずるところ食輪転ず」これが「出家」だと今の私は思う。

（令和元年8月29日記）